

日本サッカーの課題～小学生の運動能力低下から考える～

A problem of the Japanese soccer

～I think from the athletic capability fall of the primary schoolchild～

1K07B231

吉村郁人

指導教員 主査 宮内孝知先生

副査 堀野博幸先生

序章

私は高校時代から小学生の指導をしてきたが、その中で小学生の運動能力低下について興味が湧いてきた。そこで今までの新体力テストの結果から小学生の運動能力はどの程度下がってきているのか。そして、日本サッカー協会が発表した「JFA2005 年宣言」から 2050 年までに日本がワールドカップで優勝するとあるが、今までのように小学生に運動能力が低下し続けることは競技力低下に繋がってしまうのではないかと。また、運動離れによりサッカー界が衰退してしまうのではないかと思い、文部科学省を中心としたデータや文献を参考にして、現在の日本サッカーの課題を考えた。

各章の要約

1 章 小学生の運動能力低下

ここでは今日盛んに言われている小学生の運動能力低下に関して、その現状と運動能力の判断基準である新体力テストについて考察していく。

そこで文部科学省が発表した「平成 20 年度体力・運動能力調査」によると走跳投の 3 項目において昭和 60 年の記録と比較するとやはり記録の低下が目につき、50 メートル走に関しては 2004 年度 9 歳男子のタイムは 85 年度の 9 歳女子の記録と同程度になるなど子供の運動能力低下は深刻であることが分かる。

2 章 昔と現在、何が変わったのか

ここでは小学生の運動能力低下が始まった原因として時間、空間、仲間の 3 つの「間」の減少という観点から追求していく。さらに、3 つの間の減少は以前から原因として挙げられてきたが、なぜその流れに歯止めを聞かせることが出来なかったのかを同時に考えていく。

具体的な例として小学生の通塾率の増加、テレビゲームの普及、生活習慣の乱れ、空き地の減少、両親の共働きの増加、といった問題が挙がってくるが日本のスポーツはユニフォームを着て行うような施設やトレーニングは増えた。

しかし、誰でも普段着で遊ぶことが出来るような施設の開発が進んでいないため、小学生がスポーツに触れる時間が短くなる、そして触れる競技の種類が限定されることで様々な動きに対応できなくなってきたと考えた。

3 章 日本サッカーにおける運動能力低下の影響と対策

この章では小学生高学年は一般的にゴールデンエイジと言われているが、なぜそのように呼ばれるのか。なぜ、少年期の運動が大事なのか、その発達段階に応じた課題を究明することで小学生の運動能力低下や日本サッカーの育成を見直した。

ゴールデンエイジは「即座の習得」が可能な一生で唯一の機会であるため、この時期に様々な動きや技術を習得することが求められる。

4 章 日本サッカーの現在と将来

日本は今まで直近のワールドカップの優勝国から監督を招聘するなど日本代表らしい強化策は今まで皆無であった。そこで今まで参考にしてきたスペイン、フランス、ドイツ、ブラジルのサッカー強豪国といわれる国々がどのような歴史や背景で有能なサッカー選手を輩出し、ワールドカップで優勝することが出来たのかを調べることで、日本との類似点、相違点を見つけてみたが、育成する環境に大きな差があった。日本はその環境を埋める為にスポーツ振興くじの助成金で小学校の校庭の芝生化や総合型地域スポーツクラブの充実に充てられている。また佐賀県武雄市のフットサルチームを例に単純に上のカテゴリーを目指すだけでなく、そのクラブがあることでその地域の人々が幸せになれるチーム作りというものを目指すことで生活の中にスポーツが入り込んでいくと考えた。

5 章 まとめ

今回の研究を通じて、私は小学生の深刻なスポーツ離れと日本サッカーと他国の環境の差が目についた。特にエリートと呼ばれる子以外のスポーツをする環境が他国と大きな差がある。そこで地域のクラブの活動が活発になり、人々を繋ぐことによって性別年齢関係ない共通の話題になるのではないかと考える。また、日本代表チームは地域さえも関係ない日本全国民を繋ぐ懸け橋になることで

「JFA2005 年宣言」にあるワールドカップで日本が優勝した時に日本全国の人々が一過性のものではない喜びを分かち合えることが出来ると考えた。

そして、現在の日本サッカーは未完成で有ることから無限大の可能性も秘めている。社会全体が閉塞気味の日本においてスポーツはその状況を打破出来る起爆剤になり得ると私は考えている。